

白選五十一首



水原紫苑

光線をおんがくのごと聴き分くるけものか良夜眼とぢゐる

「びあんか」

菜の花の黄あふれたりゆふぐれの素焼の壺に処女のからだに

興福寺少年阿修羅にかなしみを与へし仏師の背や広からむ

胸びれのはつか重たき秋の日や橋の上にて逢はな おとうと

殺してもしづかに堪ふる石たちの中へ中へと赤蜻蛉 ゆけ

宥されてわれは生みたし 硝子・貝・時計のやうに響きあふ子ら

死者たちに窓は要らぬを夜の風と交はる卓の薔薇へ知らせよ

われらかつて魚なりし頃かたらひし藻の蔭に似るゆふぐれ来たる

まつぶさに眺めてかなし月こそは全き裸身と思ひいたりぬ

水浴ののちなる鳥がととのふる羽根のあはひにふと銀貨見ゆ

春昼は大き盃 かたむきてわれひと共に流れいづるを

「うたうら」

ちようど五冊目の歌集を刊行するところ

です。十五年ほどの歌歴にすぎないのに、いちばん初めを思い出すと、心も言葉も、何もかもが変わったようで驚いています。よきにつけ、悪しきにつけ、もう戻ることはいできない時というものがあることを思い知らされます。

それにしても、何故、歌だったのでしょうか。今もってわかりません。わからないから、おそろしくて、歌を抱きしめたくなるのかもしれない。

天与の歌人と呼びたい人たち——たとえば私の師の春日井建——は、こんな疑いを持つたりしないのかしら、と思ったりします。

歌の長い長い歴史の中でも、私は、歌の

魚食めば魚の墓なるひとの身か手向くるごとくくちづけにけり

遠花火わが白骨もかがやきて見ぬひとあまた思ひいでつも

象来たる夜半とおもへや白萩の垂るるいづこも牙のにほひす

ほほゑみの飛鳥ほとけは一本のさやげるいのち狩りたまひけり

さくら食む鳥のあかるさ終はりなき書物を得たる少女のやうに

けむりぐさ吸へばしづかに啓かるる森のこだまの炎の娘見ゆ

白鳥はおのれが白き墓ならむ空ゆく群れに生者死者あり

さくらさくら桜生みたる父母をわが父母といつかおもへる

すれちがふ風は元雅、能果てて内耳のごとき廊下ありけり

くちづけの深さをおもひいづるとき雲雀よ雲雀そらを憎めよ

死ぬるまで愛しあふ鳥 死を越えて愛しあふ鳥 白ふかきいづれ

海はあへぎて紅葉希ふことなきか死者たり皮膚剥落のマリア

こぼれたるミルクをしんとぬぐふとき天上下花野なるべし

叫びつつ樹にくちづけし少年の精在るごとし路上光れり

樹の無力 空の無力のただなかに雲のやさしき手術台見ゆ

夏草を運べる貨車が過ぎゆきてわれらは駅のままなごしに生く

青年子規・青年漱石 ゆふぐれの大河に入るを見しごとし 草として

ロンドンにただ一日のみさまよひしあれちのぎくのごときわれかも

われのみにきこえぬ鐘にふれにしがふるへるたりき鳴りてゐにしか

「くわんおんはわれの」と夢に告げ来し百濟びとあはれ

「客人」

魂と自分とがひとつになつたやうなうたびとたちが好きなのです。おのずから言葉があふれ出て来るやうな人たち。でも、その人たちにもやはり書くことの苦しみはあつたでしょう。私の苦しみなどは全くちがう次元で、深く重く。

うたいつづけて、どこかで光が見えるでしょう。それを信じて、一生、歌を追いかけてゆこうと思います。

「びあんか」「うたうら」「客人（まらうど）」「くわんおん」「いろせ」と歌集を作つてきて、どの集がとりわけ心に残るといふこともないのが不思議です。どれもわが分身としていとしくはありますが、世に出てしまえば他者と同じです。犬の親子のようなものかもしれません。

胸の中に在るのは次の一首への不安とときめきです。それが何か官能につながる感じで、短詩型独特の楽しさだと思ひます。

私は文語旧かなで歌を作つていて、それは今後もたぶん変わらないと思うのですが、だからといって古典性にのみ執着するのではなく、いろいろな試みにも挑んでみるつもりです。悔いのないうたい方、生き方を考えています。

（みずはら・しおん「中部短歌」）

雪となりて降り来るまことのうつしみよわがくちづけしきみはまぼろし

一生に一度出逢はむうつくしき雲のかたちを血もてゑがきぬ

みづうみ、と呼びかけしなり名をもたぬみづうみわれらを抱かむと来つ

さびしさのあまりにひかりいづる手を万葉集にかざしわらひぬ

太陽をわが墓としてあゆみつつ馬上の恋にこころいそぐも

みづの辺に松を生みにし幾世なるわれかまことにきみに逢はずも

火中ほなかにし間ひけるひとは狂はぬをわれはながるる鏡をもてり

さざんくわは空くわを切るはなほろほろと切らるる一切空の世界いっさいくわうよ

美しきバス来たりける昼さがり貝の腐臭をまとひてわれは

雨光るゆふやみにしてはしりゆく恋とは羽毛ながき鳥かも

「いろせ」

生きて見むさまざまの虹ひとたびは松にかかりていのちこぼせよ

性欲は星にもあらむ紺青のあふぎをとちて松風を見む

戦ひをはつかに知れるきみとゐて闇にはつねにしらとりの飛ぶ

朝川わたを渉るつめたさ沁み入れば秋草の名のわが名咲ひらきぬ

寒牡丹古代女王の幽暗のほとなりければそらもふるるな

神も独りカレーライスを食みてゐむ冬の鬱金のかがやかしさよ

榛名湖にまなざし注ぐ榛名富士いろせと呼ばばふり向くらむか

岩燕見つむる心ひるがへりきみのまことのわれになしてよ

泳ぎ来る鴨にパン投げわたくしを投げし心地す恋ひ恋へる世に